２０．菊池　勇太氏（合同会社ポルト　代表）

「『日本で一番粋（いき）なまち』であってほしい。」

菊池　勇太（きくち ゆうた）
北九州市出身。
環境コンサルティング会社、マーケティングリサーチ会社を経て、2018 年に門司港に U ターンして合同会社ポルトを起業。ゲストハウス『PORTO』など門司港を活性化するための事業を立ち上げ、岡野バルブ製造の取締役兼新事業開発本部長、大英産業株式会社街づくり事業本部のアドバイザーなども行っている。

「『この国を豊かにする』という気概で形づくられた都市」

北九州市の成り立ちとして、親分肌の人がこの国を豊かにする、という気概でできた都市だと言えるのではないでしょうか。「個人がお金儲けをしたい」というよりも、「まちの発展を通して日本という国と人々を豊かにしたい」という志が先にあったのではないかと思います。

具体的に言えば、北九州市から見て対岸の長州藩の志士達がつくった明治政府と筑豊の炭鉱で事業を行っていた安川氏、麻生氏など地元の親分肌の皆さんが協力し、西欧の技術・文化を取り入れ、西欧列強に負けない国をつくっていこうとしたんだと思います。そのためにも関門を国際港として鉄鉱石を輸入し、そこに製鉄所を作り、筑豊の石炭を運んで燃料とする、という形で北九州という都市がつくられていったとも考えられます。

そういった意味では国策によってできた都市ではありますが、そこには「西欧列強に負けない豊かな国にする」という気概があり、それを形にするために当時急速に発展した都市だと考えています。

「先を見据えて投資しようとする気質」

そのような方々の気質が今の北九州の企業の経営者にも受け継がれていると思います。「リスクを取ってでも将来必要なものに投資しよう」という気概はあると思います。今の上場企業の仕組みだと、短期的に利益を出さないといけませんが、北九州市には先を見据えて投資しようとするオーナー企業の経営者の方も少なからずいます。

「連帯意識が強く、新参者を受け入れる気質」

市民の皆さんは、近代化が進む中で、農村から都会に出てきた人々が肩寄せ合って生きてきた連帯意識があって、商業などでも手を取り合っていこう、という文化が今でも残っていると思います。

そしてその連帯意識・助け合いの雰囲気が、外から来た新しい人を受け入れる、という気質につながっていると感じています。これは、この土地に何代も住んでいるという人は少なく、近代化が進む中で多くの人が集まってきてできた都市だからだと思います。この文化が良い方向に働けば、移住者も増えてくるのではないでしょうか。

「良い気質を再び発揮して」

ただ、このような企業家、市民の気質が、今必ずしもうまく発揮されているとは言えないのではないでしょうか。企業の経営者の方々も 2 代目、3 代目となり、創業者のマインドが少

しずつ失われつつあるのではと感じています。商業においても、縮小市場になると、互いに足の引っ張り合いになってしまいます。そこをもう一度「みんなで豊かになっていこう」ということを考えれば、みんながまとまり、良い気質がまた発揮されるようになるのではないでしょうか。

「人口減少時代を先取りする都市に」

これからの北九州市を考えるときに、人口減少をマイナスに捉えないことが重要です。日本に限らず、先進国はほぼすべて人口減少局面に入っているので、北九州市においてそのような先進国の都市におけるモデルケースをつくることができれば、世界に誇れるまちになると思います。

人口において重要なのは、規模よりも密度だと考えています。人口が減少しているのに郊外に人が拡散すれば、商業は衰退します。人口減少したサイズに合わせて、郊外を農業や工業の用地にしていく、人が住むところはコンパクトに集約して、車を使わずに暮らせるまちにする、そういった発想に転換していくことが重要です。

「都市が発展していく上での KPI を変える」

これからは都市が発展する上での KPI を変えていかなければなりません。人口の数や市内全体の GDP ではなく市民一人当たりの GDP を KPI にするなど、縮小を後ろ向きに捉えるのではなく、そこをポジティブに捉えてより良い都市にするための目標に変えていく方がいいと思っています。

そのようなまちにするためにはモビリティの変革も必要です。小型のモビリティを重視して、公共交通もコンパクトに集約した方が良いと思います。バスなどの公共交通の効率と利便性を上げて、個人の車を減らすと都市が変わると思います。北九州市は港と鉄道と製鉄所で成立していたところに新しいモビリティとして自動車を持ち込んだので、移動が時代に合わせて上手に最適化できていないと感じています。対して福岡市は飛行機と地下鉄とバスなど公共交通が都市のサイズに合わせて有機的に機能しています。その意味で都市の交通 OS（オペレーティングシステム）を更新しないと都市としての活性化は厳しいとみています。

「日本で一番粋なまち」

北九州がどうなってほしいかを一言で言うと「日本で一番粋なまち」であってほしいです。「粋」は金銭価値より自分のスタンスを大事にする、北九州の人達の気質を象徴する言葉だと思います。

変革のためには、様々な利害調整が必要になりますが、そういうところでこそ「個人の利害」というよりも「みんなで豊かになろう」と先人達の大切にしてきた「粋」な気持ちを大切にしてもらいたいと思います。